

# ミャンマーと日本の「つくり手」による 無二のウェディングドレス 長年の努力により築き上げた技術の架け橋

有限会社 **アトリエエム**  
http://www.atelier-em.com/



**PROFILE 企業情報**  
●所在地: 茨城県龍ヶ崎市  
●業種: ブライダルアパレル製造業  
●資本金: 1,000万円  
●創業: 1980年3月 ●従業員数: 10人



手作業で仕上げる刺繍。  
ミャンマーに人材が育ちつつある

## 手仕事をしてくれる人材を求めてミャンマーへ

1980年にビーズ刺繍加工の工房を立ち上げ、有名ウェディングドレスメーカーから多くの仕事を請け負ってきた同社が、海外への進出を考えはじめたのは95年。当時はバブルの崩壊後で、仕事は激減していた。また、刺繍のような細かく、技術を有する作業をする**人材を国内で確保するのは費用面からも難しかった**。そんなとき出会った織研新聞の記者から、「海外展開するならミャンマーへ」とアドバイスされたことがミャンマー進出のきっかけとなった。

「織研新聞の方の紹介で、中小企業事業団(現: 中小企業基盤整備機構)の協力も得られたので、背水の陣で動き始めました」(仙田實会長)。

当時、軍事政権下における操業開始は並大抵の苦労ではなく、実際にミャンマーの工場が操業を開始したのは2000年。現地の企業とのジョイントという形を取るが、ときに裁判で問題を解決するなど、数々の困難を克服してきた。

## 工場操業 15年、5人から60人体制に

その後も必要な金額をATMから引き出せなかったり、電力不足によってミシンが使えなかったりと、さまざまな問題に直面する。「そのたびに助けられたのは、現地の方の温情や、進出していた他の日本企業の方からのアドバイスと激励でした。さらに、日本公庫の融資も受けながら困難を乗



り越えられました」。ミャンマーが軍政から民主化へ進み、政情が安定した近年は工場の稼働もようやく安定期を迎えた。当初**5人だった現地従業員は約60に増え**、その中には操業当初から働くミャンマー人もいる。さらにここ数年、退職した社員が故郷で刺繍の内職をする、いわゆる「暖簾分け」のような体制も整いつつあり、技術の伝承も見られるようになった。「刺繍は熟練した技術が必要な仕事ですが、先輩スタッフが後輩に対し、丁寧に技術指導をしてくれるので、ここ数年はかなり楽になりました」。

「気づくとミャンマー進出の先駆者になっていた」と仙田会長。デザイン制作に取組む等、クリエイターとしての才能が芽吹きつつあるミャンマー人スタッフも目立ってきた。「彼らの能力を十分に活かし、仕事の質と量を更に向上させたい」と、事業の拡大を目指し、設備面等、環境の整った新工場の建設を計画中である。



仙田實取締役会長と長男の季男代表取締役。ミシンを20フィートコンテナでミャンマーに送り、一軒家に5人のミャンマー人を集めたところからのスタートだった

## 海外展開のヒントをうかがいました

### Q コミュニケーションの方法は?

最初は、片言の英語でなんとかやり取りをしていましたが、そのうち現地で仲良くなったタクシー運転手さんにミャンマー語を教えてもらいました。また、スタッフとやり取りする中で、複数の民族の言葉も理解できるようになりました。

### Q 現地での人材確保はどのように?

初めのうちは現地のボランティア団体に人材募集を依頼しましたが、徐々にスタッフの家族・親戚関係や地域の寺院の繋がりで人材が集まるようになってきました。落ち着いて仕事ができるように社員には寮を用意しています。民族によって生活習慣や食文化が異なることを理解する等、従業員をよく知るきっかけにもなっています。

### Q ミャンマーのウェディング業界の状況は?

結婚式や披露宴では、伝統的な衣装を着ることが一般的ですが、近年ではドレスを身に着けることもあるようです。我が社は日本向け商品が中心ですが、ミャンマーの富裕層の方からウェディングドレスを注文されることもあります。そのため、今後は、現地での小売展開も考えています。



## Interview 我が社の「イズム」 海外展開を検討する企業の方へ

**小規模企業であるからこそ  
発展の可能性がある  
ミャンマー**

仙田 實氏  
◆有限会社 アトリエエム 取締役会長

ミャンマーへの進出は、娘と息子がスタッフに加わり今後の生き残りをかけての新たな出発だったといえます。当時のミャンマーは軍政下で、経済状況も芳しくなく、さらに大型台風の被害を受ける等、不安定な状況でした。そのような状況下でも、直面する課題のひとつひとつにスタッフ一丸となって向き合い、何とか乗り越えてきました。現在は工業団地もでき、産業インフラも整い始め、ビジネスは発展期を迎えています。そこで私がアドバイスをするならば、小規模企業のほうが、迅速に対応できる強みを活かし、技術を必要とする商品に特化したニッチな市場に入り込むチャンスがあるということです。情熱だけでやってきた私たちを支えてくれたのは、人情あふれるミャンマーの地元の人たちです。ここで働く人たちが、人生を長いスパンで考えて仕事ができる場所にしたいというのが今の夢です。

